
騎士で勇者で魔王の恋人!?

夢来

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

騎士で勇者で魔王の恋人！？

【Nコード】

N0864P

【作者名】

夢来

【あらすじ】

『500年生きて僕は——この世界が大好きになりました。だから僕はこの世界を自分の物にしようと思います』。

人族、獣族、魔族が平和に共存する世界に、ある日クレイジーでどチートな演説が響いた。国を守るために立ち向かった魔王討伐部隊は早速ピンチで！？

＊現在凍結中です。

騎士と兵士と決戦前夜（前書き）

初めに、この物語は魔王を倒すために旅をする王道ファンタジー小説ではないことをお知らせします。

それを頭の隅に置いて、どうぞごゆるりとお楽しみ下さい。

騎士と兵士と決戦前夜

デイマネクレアート。

この世界には3種族の民族が存在する。

この世界の歴史の礎を築き、文化を発展させた種族、“人族”（ひとぞく）。

獣の血を引き、強靱な肉体を持つ“獣族”（じゅうぞく）。

火や水など、この世に溢れる自然物が形を得、自我を持った“魔族”（まぞく）。

彼らはデイマネクレアートという広大な世界にて共存し、平和かつ平凡な生活を送っていた。

——しかし、歴史の歯車は残酷だ。

いつまでも続くかと思われた平穏も、ある日突然に呆気なく崩れ去ったのだった。

その日、“魔王”の演説が、世界中の人間の頭の中に直接響いた。

もちろんそれは私の住むメルカトゥーラ王国にも、私自身の脳内にも例外なくだ。

『やあ、このデスマネクレアートに住む皆さん。初めまして。長々した前置きは好まないの、簡単な自己紹介の後、僕が何故こんな演説をするのかを手短に話します』

柔らかな口調で、姿の见えない魔王の声は一方的に話した。

『僕は闇から生まれた魔族です。もうかれこれ5世紀くらい生きています。500年生きて僕は――』

『この世界が大好きになりました』

『だから僕はこの世界を自分の物にしようと思います。今日はその報告の為、このような演説を開かせていただきました』

実に横暴かつクレイジーな演説だった。

その演説があつた翌日から、魔王の世界征服が始まった。

世界各地の上空から、闇色の渦巻く球が落とされたのだ。それが爆発するかのように拡散したと思ったら、次の瞬間にはもう、町があつたはずの場所にそれはなく、代わりに大きなクレーターがあるばかりだった。

世界中の住民は皆、その強大な力に恐れ戦き（おののき）泣き叫び、全てが闇に飲まれようとしていた。

そんな絶望的な現状の中、我等がメルカトウーラ王国の国王が立ち上がった。

国中から腕の立つ者をかき集め、王国自衛部隊と魔王討伐部隊を作り上げた。

討伐部隊には兵士が5000名と、元々城の騎士として勤めていた

者が4名当てられた。その4名の中に、私も含まれた。

——そして

各地で魔王の情報を集め、伝説とも謳われた白龍、アザレア様の助力を得て、私たちは遂に辿り着いた。

さあ、いよいよ決戦だ。

討伐部隊は今や騎士4名、兵士は僅か26名となってしまった。

いくらアザレア様がいらっしゃると言えど、たった30名で闇の魔王にどう立ち向かう？

——そんなもの、捨て身で奇襲をかける他なからう。

例えば私が再び祖国の土を踏むことがなからうとも、悔いはなく、ただ自身の任を誇らしく思うばかりだ。

明日は早い。ここで筆を置く。

メルカトウーラに栄光あれ。

海辺にて。

我々メルカトウーラ王国国王直属魔王討伐部隊は、明日の決戦に備え野営をしていた。

私は部隊からやや離れた波打ち際で、不気味に波打つ暗い海を睥むように見詰めている。ざざん、ざざん……と、海は規則的な波音を立てる。

しばらくその音に耳を澄まし、ふと、右手に握った紙に視線を落とした。先程キャンプで書いた、“ここまでの道のり”だ。

それを見詰めること数十秒、ようやく視線を紙から剥がすと、今度はゆっくりと首を回した。私の視線の先には、直下立つ（そそりたつ）崖。

あの崖の上に……“魔王”が……。

「っ!？」

——と、突然遠い場所から自分の名を呼ばれ、私は弾かれたようにキャンプを振り返る。

「そろそろ寝るぞー」

辺りを警戒し、緊張した声が風に乗って届く。私は片手を上げて返事をする、もう一度ずつだけ崖と海を一瞥してから歩き出した。

私が立っていた場所に一枚の紙が残され、すぐに波に浚われた。

騎士と兵士と決戦前夜（後書き）

初めまして、夢来^{むくろ}です。つたない文章ではありますが、お楽しみ頂けましたでしょうか？

前書きにもありましたように、この物語は“真面目にファンタジー”ではありません。その全貌は次話で明らかになることでしょう（笑）

それでは、ここまでお読み下さり有難う御座いました。ゆっくりのんびり更新して行きますが、どうか応援の程よろしくお願い致します。

騎士に魔王がご挨拶!?

「くっ…ああ……!」

——駄目だった。
強かった…。

東の空に太陽が顔を覗かせる前、私たち魔王討伐部隊はアザレア様の背に乗って、この崖の頂上に到達した。奇襲を仕掛けるつもりだったのだ。

しかし…現実はそんなに甘いものではなかった。

「はあ…はあ…はあ…」

砕けた鎧。その上から左手で腹を押さえて、私は肩で荒く息をする。霞む視界。目の前に“魔王”がいると言うのに、その顔を見ることはできない。それはきつと逆光のせいだけではないのだろう。

焦点の定まらない視界で周囲を見渡す。

倒れた騎士たち。その体が僅かながらに上下していることに、ほんの少しの安堵感を覚える。

そこかしこに生まれたクレーター。たったの1名も姿の見えない兵士たち…。それが現状の危機感を煽る。

「う…う……」

私の腹はぽっくりと裂け、押さえる手の指の隙間から鮮やかな赤が、止めどなくトクトクと溢れ出ている。

「ア…ザレア…様…」

私を守るようにとぐろの中に囲い、伝説の白龍はぐったりと地に伏せている。

「ほんと、残念だったよね。」

その時、ふいにどこかで聞いたことのある声が聞こえた。私はこの声の主を知っている…。しかし、かなり近くで話しているはずなのに、とても遠くから聞こえて来る気がする…。

「でも、僕としては楽しかったかな」

いつか聞いた、柔らかな口調。私の視界で黒い影となっている“奴”が、その言葉と同時にゆっくりと一步を踏み出した。

「ふざける……な…」

何とかそう絞り出したが、もう私の体に力なんて入らない。右手に握った剣が滑るように手から離れ、固い岩肌の地面にぶつかって高い音を奏でた。

一歩、また一歩と、魔王は私との距離を確実に縮めて行く。

——最期まで、目は離さない。

それが王宮騎士の教えである。霞のかかる意識と視界にもどかしさを感じ、私は両手をヘルムに掛けた。

カ
ア
ア
ア
ア
ア
ン
ッ

再び、金属音。魔王が足を止めた。

はらり、とシニヨンに纏めていたはずの髪が流れた。どうやらほどこけてしまっていたらしい。腰の辺りで自前の金髪が揺れているが、流石にこの状況でそんなことに構ってはいられない。

ヘルムを外したことでごく微少によくなった視界は、変わらず魔王を捉えている。

と、魔王が再び口を開いた。

「女の子…?」

そう呟いた奴の表情は分からなかったが、声の調子から察するに驚いているのだろう。

「あ…君…」

呆然、だろうか、この声の調子は。何とか意識を保つためにぼんやりとそんな解析をしていると、

「あっ…!」

魔王は足早に私に近付き、本当にあっと言う間にその距離を数センチに縮めてしまった。

魔王が私の瞳を覗く。

……殺されるのか？

「君、名前は？」

……は？

拍子抜けする台詞に、一瞬腹の痛みさえ忘れてしまった。

「名前は？」

奴は再びそう問う。

「…クレア。クレア…ティー…ナ…」

ぐるぐるする頭で何故かそう答えると、私はついに意識を手放した。

何やら奴の満足そうな吐息が聞こえたような気がしたが……

殺す気は…ないのか……？

ざざん…ざざん…

波の音が聞こえる。

ざざん…ざざん…

瞼を通して日光が瞳に突き刺さり、眩しいを通り越して痛いくらいだ。

ざざん…ざざん…

私は…何か大切なことを忘れていないか？

ざざん…ざざん…

ざざん…ざざん…

ざざん…

「っ！しまった！！」

波音を聞きながら徐々に覚醒した意識。そうだ。私は魔王と戦っていたはずだ。

飛び起きようと慌てて体に入れたが、

「うあああっ！」

全身に走る激痛。特に腹の痛みは私でなければ卒倒する程のものだろう。

「ああ…あ…、情けない…」

ぱたん、と元のように力なく上体を寝かすと、私はそこでようやく異変に気付いた。どうにも頭が痛くないのだ。

無論、それは怪我や精神的な意味での痛みではない。背中…いや、正直頭から下は全て痛む。固い地面に寝ているのだから当然だ。しかし…。

「おはよう。具合は？ 最悪そうだね」

「なっ!？」

未だはつきりしなかった意識は、今の声を聞いて一気に霧が晴れるようにはつきりした。とても聞いたことのある声。つい先程まで聞いていた声だ。

その声が降って来た方向、真上を見上げると、

「おはよう」

一人の見知らぬ青年が私を見下ろし、聞き覚えのある声で挨拶をした。

陶器のように白い肌。薄く、淡い、紫色の柔らかそうな髪。どこか物憂げな鈍色にびいろの瞳。

目の前の青年のその容姿を、不覚にも美しいと思ってしまった。

——だが、

「その声…やはり…。っ！？　げほっ、ごほっ…ごほっ…」

“魔王”か？

そう尋ねようとして紡いだ言葉は、激痛の元となって私を襲った。喋れば喉や腹が痛い。痛みにもせれば、今度は全身に針を突き刺されたかのような痛みが走る。

「あ…はあ………」

喘ぐような吐息が漏れ、より情けない気持ちになる。

「駄目だよ、クラナちゃん。君は重傷なんだから、今は大人しく寝てなくちゃ」

そう言って除き込む男の表情は、“笑顔”。まるで貼り付いているかのような、ただ顔の筋肉を笑顔の形に作っただけのその表情に、酷く不快感を覚える。

私は不快感と痛みに顔をしかめ、魔王睨み付けた。…が、奴は私の気持ちなどお構い無しに、ゆっくりとした動作で手を持ち上げた。

「な、ん……」

何をする気だと一喝したかった。しかし、私の唇の隙間から溢れた（こぼれた）のは、声としてはいささか頼りのない音だった。

ぬ、と眼前に奴の掌が迫り、私の頭に触れた。

「っ!？」

小さく息を飲み、しかし目だけは離さずにいると、魔王の口が笑顔の形のまま開いた。

「膝枕は気持ちいいですか？」

……は？

これは…デジャヴというやつだろうか？　つい最近こんな拍子抜け感を味わった気がする。

しかし皮肉なことに、私は彼の言葉で自らが置かれた状態を理解することとなった。

「ひ…ざ…」

「膝枕。君限定だからね」

今すぐ絶叫して飛び起きたい衝動に駆られた。全く真っ白になってしまった頭を何とかフル可動させる。現状を理解するため、この体勢からの脱出を謀るため。

そして、とても重大で最も早くに気付いていなければならないことを、またしてもようやく思い出した。

「アザレア様、と…き…たい…む、フェル…！！」

同志を、友を、家族を！　何故真っ先に探さなかった！？

思い出すと同時に焦りが生じ、鼓動が早鐘を打ち初め、更には全身から嫌な汗が吹き出した。重たい頭を無理矢理に捻り、辺りを見回すべく右を見やる。

「あ…」

そこに広がる光景を見、溢した音が意味するのは、

「安心、した？」

上から降ってくる声には答えない。つまり、否定をしなかった。

茶色岩肌の地面。そこには3名の懐かしき友と、1名の尊き龍が横たわっていた。彼らには皆包帯が巻かれ、緑色の葉を貼られている箇所も見当たった。薬草の類いであろうか。

そしてそれは私も例外ではなかったようだ。視界に映る投げ出された右腕には、仲間と等しく治療が施されていた。

私たちは魔王に殺されかけた。

私たちは魔王に殺されなかった。

私たちは魔王に助けられた。

私は魔王に膝枕をされている…。

——現状は何とか理解できた。そうすると今度は次なる疑問が浮かんで来る。

「何故…？」

痛む体を叱咤して、私は再び魔王を見据えた。

「え？ 何で僕が君の名前を知っているのかってこと？ そんなの、君が教えてくれたからじゃない」

笑顔。

駄目だ噛み合っていない。全くお話にならない。

騎士に魔王がご挨拶！？（後書き）

ようやく物語が動き始めました。皆さん、お付き合い頂ければ幸いです。

ここでちょっと本編でするまでもない、世界観の設定をお話しさせて下さい。

ディマネクレアートに住む人間たちは総じて“民族”と言い、1名2名と数えます。作中ではあえて1人2人という表現をしていないのです。

さて、ここまでお読み頂きありがとうございます。次回更新予定日は12月5日です。

以上後書き、夢来でした！

騎士に魔王が恋人宣言!?

「僕はね、闇から生まれた魔族なんだ」

“ 何故私たちを殺さなかった？ ”

そういった意味を込めて放った“ 何故？ ” はどうにも相手に伝わらず、どういう訳か彼は突然自分の生い立ちを話し始めた。

「魔族は自分が生まれた自然を操ることができる。…っていうのは、君にとっては常識中の常識かな？」

こいつ…前置きが長い。世界征服宣言の演説では長々とした前置きは好まないなどと言っていた癖に、話が違う。

「もう一回言うけど、僕は闇から生まれた魔族だ。厳密に言うと、海の奥底、光が届かない場所の闇から」

もう黙って（声は出ないら物理的には黙っていたのだが）奴の話に耳を傾けることにしよう。

「だからね、僕は闇と海の自然を操れるの」

右手の人差し指をぴっ、と立て、にこりと笑むと更に続ける。

「闇の能力は…もう見たよね？ 全てを呑み込んで闇に葬り去る能力だ。それで、海の能力が分かりにくいと思うんだけど…」

そこで魔王は言葉を切った。直後、

『つまり…これね』

頭の中に奴の声が響いた。いつかの演説の時のように。

『海は全てが最終的に集まる場所であり、全ての発信源でもある。だからね、僕はテレパシーじみたことで皆に話し掛けることができるんだ』

ここまで聞けばあの日の演説の仕組みは分かった。…が、まだ分か

らない。何故今そんな話をする？ 自由か、こいつ。

「…で、その逆もしかり。誰かが僕に心の中で話し掛けてくれれば、それが僕に伝わるんだ」

魔王はテレパシーを止め（やめ）、自らの口でそう言った。私は何回かその言葉を反芻し、この話の意味、意図を飲み込んだ。

『つまり…声を発さずとも、私はお前と会話が可能と言うことだな？』

「そういうこと」

へらりと笑う男に若干の苛立ちを覚えつつ、だったらその説明だけで充分だろうと思ったが、それは言わなかった。否、伝えなかった。兎に角、これでようやく話を進めることが出来る。

『何故、私たちを殺さなかった？』

波の音が聞こえる。

風が吹き、まばらに生えた木や草が揺れる。その度に風はさらさら
と爽やかな葉擦れの音を運んで来る。

ああ、どこかで鳥が鳴く…。

魔王に質問をして、たっぷり数分。奴は私の頭を撫でるばかりで、
一向に私の質疑に答える素振りは見せない。

優しい手付きで撫でられる頭。魔王の鈍色の瞳はどこまでも穏やか
で、本当にこいつが“魔王”なのかと疑ってしまう。

あまりにも穏やかなる時間の中で、私はだんだんと瞼が重く……

『ならん!』

ここで一喝。危ない、己を見失いかけていた。

「もう…折角のいい雰囲気を…」

『ふざけるな! 何がいい雰囲気だ! 何故私の質問は受理されな
かった!』

沸き上がる怒りはもう収まらず、そのまま言葉となって相手にぶつかる。

「えっ？ 受理はされたよ？」

きょんとした顔で言葉を返す魔王に、殺意さえ沸いてくる。

『だったら何故私の質問に答えない！？』

語気を荒らげて質問をぶつけると同時に、喉の奥で小さく唸って威嚇する。

「答えてたでしょ？ 体現してたんだよ」

全く変わらぬ態度と変わらぬ笑顔。しばらく私と魔王は睨み合い（傍目から見れば恐らく見詰め合い）、両者が両者の次の発言を待った。

浜辺に潮が打ち寄せられ、そしてそれが海に戻って行く音が聞こえた。回数にしておよそ5回程。

『意味を分かりかねる』

先に口をきいたのは私の方だった。

「んっ…分かりかねるって言われてもなあ」

間髪入れずに魔王の呑気な声。

「だからさ——」

「君を気に入ったってことだよ、クラナちゃん」

……は？

思考が一瞬停止した。拍子抜けしたのではない。今度は、今度はかりは、本当に意味を分かりかねたからだ。

「僕ね、海が好きなんだ」

完全にフリーズした私の思考を動かしたのは、魔王の一言だった。

「朝も夜も光の届かない海にいて、ある夜突然この“形”を手に入れて…」

この短時間でこいつの性格が一つだけ分かった。こいつは実にゴーイングマイウェイだ。我が道を行く。道なき道突っ走る。そんな男に私は着いて行けずに立ち止まる。

「宛てもなく歩いた。歩いて歩いて、この崖の上まで来た」

分かった、聞こうじゃないか。この話が私の疑問の答えとなるのなら。

「そこで初めて、僕は海を見た。朝日に照らされてキラキラ輝く海を。空の青が水面に映って、蒼く揺らめく…海の碧を」

魔王は私から視線を外すと、どこか遠くを見るように目を細めた。反射的にその視線を追って頭を右に向けると、遙か目下、延々と広がる海が私の両目に飛び込んで来た。

「大嫌いだった海が、大好きになった。青い海も、赤い太陽も、緑の草も、茶色の地面も、僕にとっては初めて見るものばかりで…」

魔王の言葉を耳に入れつつ、しばし煌めく水平線に見とれる。

「こんなに綺麗なものがたくさんある世界を、大好きになった」

再び、両者が共に次の発言を待つ。どちらもなかなか口を開かず、2名の間には静寂が訪れる。遠くから吹いて来た風が、微かに磯の香りを漂わせる。

『だから…世界を自分の物にしたいと思ったのか？』

今回も、沈黙を破ったのは私だった。

「うん」

短く即答する魔王へ視線を戻すと、私は責めるように問う。

『お前の勝手な独占欲で、一体どれ程の命が失われたと思っている？ 旅立った者たちの無念、残された家族たちの苦しみが、お前には分からないのか』

「うん」

：またしても、即答。腹の底からふつつつと沸き上がる怒りに、体が僅かに震えた。

ふざけるな！

その一言を吐き捨てるより一拍早く、魔王が口を開いた。

「だって僕にはいなくなって寂しい相手なんていないし、僕がいなくなつて悲しむ誰かもいないんだから」

それは——同情を誘うための台詞ではなかった。奴は笑っていた。先程と少しの違いもない、貼り付いた笑顔…。

私は黙った。感情の読めない相手に恐怖したのではない。寂しい内容に二の句が告げられなくなったのでもない。

「でもね、世界はもういいや」

魔王に——抱き締められたからだ。

…って、おい！ 待て！ どういう状況だ！？

何の前触れもなく迫って来た魔王。奴の腕に頭部を抱え込まれ、顔は胸板に押し付けられている。

『なっ…何をする！？ 止めろ！ 離せ！』

弱い力で抱き込まれているので傷に響くことはないが、予想外の行為に驚いてしまう。体が言うことを聞かず、もがく事すら叶わない。

「何で殺さなかったかって聞いたよね？ 君を気に入っただって答えたよね？」

どうやら奴はその状態のまま、私の先程の質問に答えるつもりらしい。

「何で気に入ったかって聞くんでしょ？ 答えてあげる」

私の耳元に口を寄せ、魔王は内緒話でもするかのように囁く。

「君が、僕の好きな海によく似ているからだよ」

『……は？』

本日何回目かの疑問符付き単語を、とうとう表に出した。

「君がヘルムを取った時、一番最初に思ったよ。綺麗な髪だなんて」
また、唐突に感想を話し出す魔王。

「だってその髪、まるで水面に陽が射して、キラキラ反射してるみたいだ」

しかしこの発言にはすぐに説明を入れ始めた。奴はぱっと私から離れると、鈍色の瞳を銀色くらいに輝かせて、今度は私の瞳を除き込む。

「それでね、目が、凄く、素敵だと思う」

目、凄く、という単語を強調しながら、奴は力説する。

「青！ 海の色！ ずっと空を見詰めてたみたいな、コバルトブルー。クラナちゃんの全部が、海みたいだと思った。だから、気に入った」

…まさか自分が海に似ていると言われる日が来ようとは。楽しそうな声ではしゃぐ奴の顔はよく見えないが（顔が近いのだ）、何にしろ私は気が抜けた。

世界を恐怖のどん底に陥れ（おとしいれ）、国家を大きく揺るがした“闇の魔王”が…これか？ こいつはこんなにぺらぺらな、むしろ

ろ無邪気な好奇心とさえ言ってしまうような動機で、数え切れない程の命を犠牲にしたのか？

目の前の男は想像していた魔王像とあまりにもかけ離れていて、憎むべきはずの相手の憎み方がよく分からなくなってしまった。

わたしが呆然と絶句していると、饒舌になった相手は更に熱く語った。

「だからね、今度はクラナちゃんが欲しい！　クラナちゃんが手に入れば、世界はもういいんだ。クラナちゃんが僕の人になってくれれば、世界から僕以外の住民を追い出そうとしたりしない。話ができて、強くて、海みたいなら、クラナちゃんの方がよっぽど価値がある」

再び霞の掛かり始めた頭で、ぼんやりと思った。ああそうか、こいつは“住民を追い出す”という概念で民^{たみ}の命を奪っていたのか、と。一途に世界を愛したが故の過ちか？

それにしても…私が奴のものになれば、世界には再び平和が訪れるのだろうか？　もしなければ…その時はそういうことだろうか？

そして、何よりも強く思った。“クラナ”、かつて誰にも呼ばれたことのない可愛らしい愛称。

その呼び方は止めてくれ！

『私の名はクレア。クレアティーナだ。』

「うん。知ってるよ、クラナちゃん」

：ああ、どうにも頭が痛い。無論、それは怪我や物理的な意味での痛みではない。

精神的に痛い。

騎士に魔王が恋人宣言！？（後書き）

いきなりですが、祝！ 閲覧総数1000hit突破！！

このような未熟者の作品に目を通して下さる方がいらっしゃるとは、感謝感激雨霰です！ ありがとうございます。

小説及びユーザーのお気に入り登録は、お気軽に、ご自由にして下さると嬉しいです。

次回更新予定日は12月12日です。今後とも、騎士と魔王シリーズの応援をよろしくお願い致します。

以上後書き、夢来でした。

騎士と魔王と仲間たち

魔王の話によると、私が意識を失ったのは早朝。意識を取り戻したのが正午を少し過ぎたくらいだそうだ。

仲間たちよりも重い怪我を負いながら、彼らよりも早くに目覚める。元々他の者よりも頑丈な身体ではあったが、ここまで来ると我が身ながら尊敬の念を抱いてしまう。

ちなみに、私の身体で最も怪我が酷かった箇所はやはり腹だったらしいが、幸い臓器に損傷はなかったらしい。（らしいらしいと連呼するのは、もちろん魔王談だからである）

しかし馬鹿みたいに出血が止まらないので（こう表現された）、やむを得なく乱雑に縫ったのだとか。傷になるのは別段構わないが、こんな場所で一体何を使って縫われたのかは気になるところだ。

少々話が逸れて（それで）しまったが、私がしたかったのは仲間たちも無事意識を取り戻したという話だ。西日を眩しく感じ始めた頃、つまり、つい先程に。

今私は魔王の膝の上に座っている。自分の力だけでは座ることは愚か、起き上がることさえままならなかったため、致し方なくこうなったのだ。ふう、と一つ息を吐き（つき）、目の前にずらりと座る仲間たちを見渡す。

「…と、まあこんなところだ」

険しい表情の面々に見詰められる中、私は吐息交じりの聞き取りにくい声で話をくくった。目覚めた彼らにまず、先程我が身に起こった突拍子もない話を説明していたのだ。

皆が一様に呆然としている様子を見ながら、私は魔王の能力が不便^{ちから}である件について考えていた。

彼のテレパシーは彼を介して第三者同士で会話することができない。だから私が自らの痛む体に鞭を打ちながら、なるべく傷に響かないように今の状況を説明せざるを得なかったのだ…。

ちらと顔を上げて対面を窺えば、つい先程まで呆然としていた4名の仲間たちは、今はかなり深刻そうな表情を浮かべていた。

それはそうだろう。正直な話、私にだって今の状況なんて理解できていないのだから。

しんと静まり返る一同を、改めてぐるりと見渡してみる。横一列に並ぶように座った仲間たち。向かって左から龍、獣族、獣族、魔族。実に多種多様な面子^{めんつ}である。

共に戦い共に歩み、悲しみも喜びも共有して来た仲間たち。彼らは今、それぞれに何を思っているのか――。

…と、その時。左から二番目に座る獣族の男が、ぽつりと言葉を漏らした。

「……………るい」

小さな小さな音で紡がれた言葉。それは聞き取れない程に微かな声で、細かく震えているように聞こえた。

立てば身長が180センチはあるだろう、体躯のいい男。短い黒髪が西日に照らされ、まるで濡れているかのようだ。

彼は項垂れてこそいたが、決して闘志を失った訳ではないらしかった。顔の横に付いた三角の耳が、ゆらゆらと背中の後ろから見え隠れする尾が、彼の中で燃える何かを表していた。

刹那、犬の獣族、斎騎^{とぎ}は勢いよく顔を上げると、文字通り大声で吠えた。

「ずるい……！」

……は？

……いや、“は？” どころではない。どうした、斉騎！

「だってずりいじゃねえかよ！ 世界脅かして“やっぱ世界いいからクレアください”！？ そんな簡単にクレアが手に入んならオレだって世界征服やってやらあ！」

蜂蜜色の瞳をぎらぎらと光らせ、とてもカタギとは思えないドスの効いた声で捲し立てた。

どんな思考をも停止させる空気読まずな発言に、私含めた魔王討伐部隊隊員全員が彼を見て、そしてゆっくりと私を見る。更にまた斉騎を見て……

「今問題にするべきは、そこじゃないと思うの」

向かって一番右に座る魔族が、可愛らしい声で真剣に私の気持ちを代弁した。宝石のように透き通ったピンク色の瞳が、ぱっちり開いた大きな目が、体躯のいい男を捉えて離さない。

風の魔族、フェルことフェネルを支援するかのように、ざあつ、と一陣の風が吹き抜けて、その艶やかな銀色の髪を揺らす。肩まで伸びた巻き毛（癖っ毛なのだ）が風に踊る。

誰も、何も喋らない。

ちらりと視線を移動させると、大任を終えたかのような面持ちで構える斉騎の隣に、一切表情を纏わぬ男がいた。彼の紅い瞳と目があって、そのまま停止する。

斉騎と同じ色の、しかし彼よか長い黒髪。顔の横から垂れる長い耳。兎の獣族、たいむ颯夢は、何も言わずにただこちらを見詰めるばかり。きつとどうしたら良いのか分からないのだ。

……私と同じように。

「……あああ、もう！ 何で斉騎ってばそんなにおバカさんなの！？」

永遠に続くのではないかとさえ心配した沈黙は、フェルのぴいぴいした猛講義で終止符を打った。

「なっ…！ 馬鹿たあ随分失礼だな！」

「だってほんとーのことじゃない！ もっとほかに聞くことなんてあるハズでしょ！？」

「うるせえな！ オレは他を差し置いてでも真っ先にそれを言いたかったんだよ！」

「そーゆーのをジコチューって言うのよ！」

沈黙は破られたただけではなく、彼らの騒がしさの引き金となった。
むさ苦しい巨人と、全長140センチあるかも疑わしい小人がやいやいと言いつ合っている。

「斉騎はもうちょっと空気を読めるようになった方がいいと思うの
！」

「うるせえうるせえ！ キーキー声が耳に響くんだよ！ 犬の聴力
舐めんな！」

「…ちよっとお二方。収集が着かなくなるのももう少し落ち着いて
下さいよ」

ついにそれまで黙っていた颯夢が仲介役に割って入る。：が、

「颯夢！　今まで黙ってたんならずっと黙ってたて！」

「そうやって自分だけいい子ぶろうってか？　ハッ、偽善者もいいところだぜ！」

「……よってたかって勝手ばかり言って。大体、貴方が思った事を直ぐに口にするから話がこじれるんでしょう！」

すっかりいつものペースを取り戻した2名に煽られ、結局口論に巻き込まれてしまった…。

けんけんがくがく、ああでもないこうでもないと騒ぎ立てる面々を尻目に、私は彼らの口論に参加していない1名を見た。とぐろを巻いて座る白龍、アザレア様だ。50メートルは優に越す巨体を小さくし、呆れた顔で斉騎、颯夢、フェルの3名を見守っていらっしやる。

…と、アザレア様が視線をすいと動かす。翡翠色の神々しい瞳が私の視線を捉え、地を震わすような低い声で仰った（おっしやった）。

「…我^{わたし}に助けを求められても困る」

——全く、ごもつともで御座います。

その後も彼らの口論は留まることを知らず、売り言葉に買い言葉でヒートアップしていた。

言葉を挟む隙のない言い合いに、どうしたものかと頭を悩ませる。時折ちらちらとアザレア様を見やるが、助力を得ることはできずに今に至る。

馬鹿だの阿呆だのという低レベルな言い合いを聞いていると、何だかすっきり脱力してしまう。はあ、と一つ溜め息を吐いて、私は視線を落とした。

落とした視線の先には、自身の体とその前面で組まれた魔王の手。胴に回されたそれは思ったより大きく骨張っていて、何より陶器のように白かった。

半ば意識を停止させて奴の観察をしていると、ふいに頭の中で声が響く。

『ねえ、クラナちゃん。もう喋っていい?』

そう言えば私が仲間に状況を説明する間、彼には一切黙っていても
らうように頼んだのだった。

『あ…』

どうしようかと逡巡すると、奴はひょいと横から私の顔を覗き込ん
で来た。

近い近い!

首から上しかほとんど動かない体。頭を使って魔王の顔をぎゅっと
押し退けると、私は答えた。

『好きにしろ』

「うん!」

即答で元氣のよい返事が返ってきた。

「はい！ それじゃあ今から話し合いの結果まとまった質問をします！」

フェルのぴいつ、と鳴く声で、私たち3名（私とアザレア様と魔王のことだ）は一斉にそちらに意識を集中させた。

それにしても：散々口汚く罵りあっていたというのに、まとまることなどあったのだろうか。

そんな私（と、恐らくアザレア様）の心配を余所に、フェルは甚く（いたく）真面目な顔で“まとめの質問”をした。

「魔王はクレアが欲しいって要求だったけど、それってクレアをここですっと可愛がるってことなの！？」

質問内容を聞いてぎょっとした。あまりに突飛であまりに生々しい。まさかとは思うが…そんなこと絶対にお断りだ！

冗談じゃない！！

彼らの質問自体は間違っではないが…聞き方というものがあるだろう。体の怪我のことも忘れ、慌てて抗議しようとしたその時、

「えっ！ それって結婚!？」

「馬鹿を言うな！ 冗談じゃない！！ げほっ、げほっげほっ……」

魔王の嬉々とした声。続いて私の激しい否定。

何とか軌道修正を試みようと思ったが、時すでに遅し。“結婚”という単語に反応した者たちが、一気にこちらに食い付いた。

「結婚!？ 誰がお前なんかオレのクレアをやるかよ！」

齊騎、お前のじゃない！

「そんななどこの馬の骨とも分らないようなヤツに…クレアは渡せないんだから！」

結婚はもう決定なのか！？

「クレア…可愛いクレアティーナ……。小僧！ 貴様に渡すくらいならとつくに我が貰っておるわ！」

どうしたアザレア様！

「……………」

無言の圧力！

…いけない。皆どこかしら頭の螺ねじが外れている。どうにか全員を落ち着かせようと思ったのだが――

「あはは、結婚はまだ早いよ。まずは付き合うところから始めないと」

おっ…お前えええええ!!　もう黙っている!

それから、第二次罵詈雑言合戦の火蓋が切って落とされたのは言うまでもない…。

「…では、魔王は我々と共にメルカトウーラ王国まで連れて行く、
で異論はないですね？」

辺りが暗くなり始めた頃、颯夢がそう仕切った。

「ないよ。僕としては願ったり叶ったりだ」

「いーんじゃないの？」

「どうせ反対したって強制的に賛成させられるんだからよ」

「我は頑なに反対だがな」

全体的に反対されているが、私は颯夢に頷いて賛成の意を示した。

「では、賛成多数ということで、魔王を連れて国に帰りましょう」

颯夢その場をがまとめると、魔王討伐部隊の隊員は各々（おのおの）
楽な姿勢をとった。

「やーっと帰れるよう」

両足を伸ばし、後方に両手を着くフェル。

「任務成功…なのかねえ？」

胡座あぐらをかいて首をコキコキと鳴らす斉騎。

「……ふう」

深呼吸する颯夢。

「飛んでいるうちに傷が開かなければよいがな」

しゅるしゅるとどぐろを解き、重そうに立ち上がるアザレア様。

そして、

『あっちを向かせろ。』

魔王に指示を出し、“ある方向”に向きを変えてもらう私。

気付けば私以外の隊員も全員、その“ある方向”を向いていた。

我々が見詰める先、そこには大小様々な大きさのクレーターが出来ていた。私たちが戦い抜いた、多くの魂が眠る場所…。

重たい右腕をゆっくりと持ち上げ、それを左胸の上に置いた。私に続き、フェル、斉騎、颯夢が同じ行動をとる。アザレア様が目を閉じた。

「よく、ここまで着いて来てくれた。——ありがとう」

“彼ら”に心からの敬意を示し、私は黙祷もくとうを捧げた。

——かくして、私たちの長期に渡る任務は、やや腑に落ちない形で幕を閉じたのだった。

「さーて、帰ってからが大仕事だぜ？」

「うゝ…考えたくないよう」

「お二方、ばやいてないでアザレア様の怪我の補強を手伝いなさい」

「すまぬ、迷惑をかけるな…」

『…ねえ、クラナちゃん？』

『何だ』

「……………」
「ごめんね」

騎士と魔王と仲間たち（後書き）

ようやく仲間たちが登場しました。読んで頂いた方には分かるかと思いますが、馬鹿ばかりです。正直逆ハーになるのか怪しいです……。ギャグハーになったらどうしよう！！（寒っ↑）

そんなこんなで魔王を拾った討伐部隊ご一行。これからの生活はどうなる！？　そして、サブキャラたちの扱いは！？

次回更新予定日は12月18日です。またのご閲覧をお待ちしております。

以上後書き、夢来でした♪

騎手と魔王の小休止

メルカトウーラ王国、首都スマイラック。王宮に仕える騎手やメイドが寝泊まりをする宿舎棟のある一室で、女が机に向かい書き物をしていた。

腰程まである長い金髪を一つに束ね、机上に広げた厚いノートにペンを走らせている。

彼女が書いているのは、どうやら日記のようだった。

3の月 25の日

日記なんて随分久し振りに書く。2日前、全てが終わった。今日までの忙しい出来事を少しでも忘れぬよう、ここに記しておきたいと思う。

2年前、4の月。前ページにも記載したように、私は魔王討伐部隊に抜擢ぼってきされた。当時18歳、成人したてだった。その他王宮騎士ほかの内うちで抜擢されたのは、風の魔族・フェネル、犬の獣族じゅうぞく齊騎、兎の獣族・颯夢だ。

王国を出発して半年と三月みつぎ、魔王討伐部隊は伝説の白龍・アザレア様を加えて魔王に挑みに行くのだが…その辺りは追々（おいおい）書いて行こうと思う。

去年、2の月。私たちは魔王との対面を果たす。奴は底抜けに強くて（今にして思えば力を制御することを知らなかったただけだろう）、我々は一切歯が立たずに敢えなく（あえなく）玉碎した。

しかし、魔王は私たちを殺すことなく、私が手に入りさえすればもう世界には手を出さないと言った。奴は海が好きらしい。彼曰く、私の瞳と髪が海の色と輝きに似ているということ、いたく気に入ったそうだ。

それだけでも十分意外なことなのだが、彼の意外性はその外見にも表れていた。陶器のように白い肌、日光に透けるふわふわの髪。薄紫のそれは、見方によっては淡い桃色に見えることもある。鈍色にびいろの瞳はきらきらと（爛々とはではない）輝いて、いつも銀色くらいに見える。

自然から直接生まれた魔族は、生まれた時の姿から死ぬまで形が変わらない。奴の外見年齢は23から25歳程度で、幼い内面（最近発覚した）から、うっかり彼が500年生きていることを忘れてしまいそうになる。

そう言えば、母親の胎内から生まれた魔族もある一定の大きさまで成長したら外見が変わらなくなる。自然から生まれた魔族程長生きはしないが：フェルはこの2年で一体幾つになったのだろうか？

あいつの外見年齢はどんなに多く見積もっても13か14。私が王宮騎士に就いた時にはすでにあの外見だったが……いや、この話を書くのはもうよそう。フェルの言葉を借りるなら、「女性の年齢を詮索するなんて失礼なのよっ」、か。

兎に角、我々は魔王を連れてこのスマイラックに帰還した。アザレア様以外の討伐部隊隊員は即病室送りとなり、私は怪我が完治する間（詳しく言うならば半年程度だ）ベッドの上で書類の始末などを行った。

その間世界は復旧に向けて尽力し、私よりも早くに怪我が治った斉騎たちも、それに全力で携わっていたらしい。その話をベッドの上で颯夢から聞いた時には、自分の現在の状況がたまらなく情けなく思えた。

そしてついに半年後、私の怪我はどうとう完治した。去年の8月のことだ。世界も何とか体制を立て直し、魔王襲撃以前の日常を取り戻しつつあった。

それからは私も社会の体制、政治の立て直しに加勢し、世界中を渡り歩いた。魔王の闇の能力は万物を闇に葬る能力。ただ荒れてしまった土地を均す（ならす）のならまだ容易だが、“無くなって”しまった土地を元に戻すには大層骨が折れた。

そして――

今年、3の月 23の日…全てが終わった。ほんの2日前の出来事

だ。

この2日間、私はある大きな会議に出席した。そこである重大な事が決定したのだった。（機密事項なのでこれくらいしか書けない）

そして今、私はこうして日記を書いている。長い戦いの末に私が再び祖国の土を踏めたこと、こうして自室で日記を書けること——全てが多くの犠牲の上に成っている。

我々は決してそのことを忘れてはならない。共に戦った勇士たちに、私は大きな感謝を寄せている。

ここからは完全に余談だ。それというのは……まあ、魔王のことなのだが。

私が病室にいる間、奴はやたら私に会いに来た。そこで幾度となく会話を交わし、私は驚く程（時に呆れる程）彼がものを知らないことを知った。

例えば、ある日彼に“何故いつも笑みを絶やさないのか”と聞いたことがあった。答えは実に単純明快で、“楽しいから”だそうだ。

見るものの全てが新しく、また珍しいのだとか。世界は刻一刻と姿を変え、一秒だって同じ景色であることはないのだと言う。そんな世界を見ることが、どうしようもなく楽しいのだと。

あまりにも無邪氣過ぎる意見に拍子抜けした直後だった。奴のものの知らなさに驚かされたのは……。

「笑う”っていう概念はあるんだ。けどね、生まれてこの方笑うものを一度も見ることがないから、“笑い方”が全然分からないんだ」

その衝撃的な発言を、私はきっと一生忘れはしないだろう。奴はまるで物心ついたばかりの少年だったのだ。

——まあ、私はそのことを別段馬鹿にしたりはしない。分からなければ、知らないことは、これから学べばいいのだから。

奴はあれでいて中々勉強意欲と向上心がある。この1年、奴の生活がどんなものだったのかは知らないが、恐らくよく街に出たりもしたのだろう。

あいつは最近、笑い方を覚えた。

初めて会った時のような“筋肉を笑顔の形に貼り付けた顔”ではなく、自然と顔が綻ぶ（ほころぶ）ような、“少年みtainな笑顔”を見せる。

この調子で善なる事ばかりを吸収して、善良な民^{たみ}になって欲しい。
（書いていて我ながら母親のようだと思った）

…さて、先程から背後で“魔具”についての説明を求めている者がいる。ここで筆を置くとしよう。

追伸、私にはどうしても、生憎、残念ながら、あいつを憎むことが
できそうもない。

メルカトウーラ王国、首都スマイラック。王宮に仕える騎士やメイ
ドが寝泊まりをする宿舎棟の私の部屋で、私は日記帳をぱたりと閉
じた。

「ねえクラナちゃん。ねえねえねえ、ねえってば。あれどうなっ
てるの？ どういう仕組みなの？ ねえ聞いている？ 無視しないでよ。
ねえってばねえ」

背後から魔王がとても呼んでいる。

ゆっくりと振り向いて見てみれば、向こう側の壁に沿って置かれた
ベッドに奴が腰掛けており、マグカップを片手に面白くなさそうな
顔をしていた。

：そう、これこそが大きな会議で決まった重要な事である。国は奴
の危険性を注意して、その監視役を私に命じたのだ。実に妥当な判
断だと思う。

更に、民たちの間に混乱を招かぬよう、彼は“魔王に拐われた哀れ

な民”という設定を付けられた。それには彼も受諾じゅだくしたらしいが：本当に分かっているのかやや不安である。

「さっきから呼び過ぎだ」

言いながら立ち上がって奴に近付き、彼が手に持つ空のマグカップを受け取る。日記を書く前に散々うるさかったので、蜂蜜をたっぷり入れたホットミルクを与えておいたのだ。（思いの外それで静かになった）

受け取ったカップを部屋の奥に設置された流し台に置いて戻って来ると、魔王がじっと私を見ていた。

「ほら、どうした？」

部屋中央に置かれた木製の丸テーブルと椅子。それに腰掛けて魔王と向き合うと、私は話の続きを促した。

「だから、あれってどうなってるのって聞いているの」

魔王は無視されていたことに不機嫌なのか、不貞腐れた（ふてくされた）顔で、しかし聞きたいことはしっかりと質問した。ちらと顔

を上げて天井を見、その中心に取り付けられた灯り（あかり）を指さす。

「どこでもあるよね。ボタン一つで明かりが点くなんて画期的」

話している内に機嫌も直って来たのか、視線を戻せばもうにこりと笑っていた。怒っていたかと思えば次の瞬間には笑っている。…全く、子供のようだ。

思わずこちらにも笑みを溢してしまうと、魔王は益々楽しそうに笑った。

「そうだな…何から説明したものか」

何となく穏やかな空気の中、私は彼の質問に答えるべく、“魔具”についての説明を考えた。

「お前が知りたがっている物は総じて魔具といい、我々の生活になくてはならない物だ」

頭の中で説明することをまとめた私は、まず奴が差す物が何である

のかを明らかにした。

「まぐ……うん」

恐らく分かっていない。

「魔力を用いて稼働させる生活の必需品だ。この国には5ヶ所に“魔力局”が存在していて、そこから送られてくる魔力を灯りやコンロに流すことにより、明かりが点ったり火が点いたりするんだ」

ああ、それにしても説明が難しい。まさかジュニアスクールの子供でも知っていることを説明しなければならないとは……。自身の人生に置いて魔具の説明をしなければならなくなるとは、夢にも思っていなかった。

内心上手く伝わったかどうか不安でいると、魔王は数回頷いてから口を開いた。

「つまり…ボタンを押したり摘まみを捻ったりすることで魔具に魔力を流してるってこと？」

どうやら伝わったらしい。ほっと息を吐いて（ついて）「そうだ」と小さく頷けば、奴は楽しそうにこう続けた。

「すごい！ 便利な生活だね」

我々が当たり前のように使っていた物でも、こいつにとっては感動の対象だったのか…。改めて、こいつが500年間民の暮らしに触れていないのだということを思い知らされた。

「あれも？」

1名魔王の境遇に納得していると、奴は好奇心旺盛な瞳で簡易キッチンを見、その流し台を指差した。

「ああ…水は違う。水道局が地下に通した管くだから水を送っている」

同じように説明をすると、奴は感心したように「へえ」と漏らした。

「じゃあさ…」

街に来て新しく覚えることより疑問に思うことの方が増えたのだから。彼は休む間もなく質問をぶつけて来る。

「それはだな…」

私も休む事なく一つ一つ説明を返していく。

この晩、私の部屋は一夜限り、“私の私による魔王のためのジュニアスクール”となった。

「ちなみに魔具には装填魔具そうてんという物があり、これは自分で魔力を注入して使う物だ」

「そうなんだ」

「王宮騎士には装填魔武具の所持、及び使用が許可されている」

「じゃあ魔力がない民は王宮騎士になれないってこと？」

「その通りだ。魔力を持たない者が少ないとは言え、世界中に3割は居るからな。残念ながら、そういう者は王宮騎士にはなれない。…まあ、街の保安官などにはなれるが」

「ふうん。いろいろありがとう、クラナちゃん。ついでに聞くけど…クラナちゃんの仲間も装填魔武具って持ってるの？」

「ああ。フェルが羽ペン、斉騎がスプレー缶、颯夢が人形だ」

「……………何かそれ、弱そうだね」

「言葉だけで羅列すると…どうしてもな……………」

騎手と魔王の小休止（後書き）

こんにちは。今回の話はやたら説明臭い話だったかと思います。少しの間、こうした説明臭い話が作中にあったりすると思いますが、何となくふわっと読んでおいて頂ければ幸いです。

次回更新予定日は、12月25日です。

以上後書き、夢来でした。

騎士と魔王のお引っ越し!?

私の私による魔王のためのジュニアスクールが開かれた翌日の朝。私は部屋のドアの前で固まっていた。

開けっ放しのドアの外には国王の使いの者がいて、涼しい顔をして直立している。

「これ…は……」

彼から手渡された1枚の書類。それにざっと目を通した私は、その内容に自分の目を疑った。

きつと私が斉騎なら「なんつつつじゃこりやあああああ!!」と絶叫した後、目の前の男の胸ぐらを掴み、がくがくと揺さぶっていたことだろう。

だが、幸いにも私は斉騎ではない。落ち着いて一度深呼吸をすると、再度書類に視線を落とした。

貴公に魔王監視の任を命ず

まず書かれていたのはその言葉。

ああ、それは分かっている。数日前の会議で決定したことだからな。
だが、この書類にはどうしても見逃せない条件が書かれていたのだ。

ついでには、市街地の東の外れ（はずれ）にある民家で魔王と共に暮らすこと

……何故だあああああ！！！！

待て待て、何故そこまでしなくてはならない！ 確かに監視役には
抜擢されたが…まさか一つ屋根の下であいつと同居か！？

その他の条件には…

一つ、この任を受け持つ間、私にはその他一切の任が回らなくなる
こと

一つ、ただし、その場合も給料の扱いは他の騎士同様であること

一つ、今まで通り宿舍棟への出入りは自由であること

…などが記載されていた。

愕然と書類を凝視し続ける私に追い討ちを掛けるかのように、飄々（ひょうひょう）とした態度で王の使いの者が告げた。

「その書類にもあるように、これから貴公が生活する家は市街地の東外れにある、2階建ての青い屋根の家です。こちら、家の鍵で御座います。退去は本日より1週間以内にお願ひ致します」

予め（あらかじめ）用意されていたかのような文句を残し、彼はドアの向こうに消えた。私の手に残ったのは、その彼に渡された書類が1枚と銀色の鍵が2つ…。

閉められたドアを呆然と見詰めていた私だったが、今一度書類に目を向けた。

書類の一番最後に記されていたのは、紛れもなく国王の直筆サインと印であった…。

「なっ……何だとおおおおおおおおお!!?」

早朝の宿舎棟に、私の絶叫が響き渡った。

「お前、これについて何か知っているか?」

朝食が済んだテーブルにて、私は自分のすぐ前に座る魔王に尋ねた。
テーブルの上に乗っているのは、今朝がた貰った件の書類くだん。魔王の
方に向きを合わせて、この納得し難い（がたい）内容について聞い

てみた。

「ん？　なあに？」

彼は手に持っていたカップを置くと小さく身を乗り出し、差し出されたそれを覗き込んだ。まだ寝起きの完全に覚醒し切っていないぽやんとした笑顔で、じっと書類を読んでいる。

…全く。一体どういう了見だ。

私は彼のその横顔を見ながら、出された条件に内心悪態をついた。

…つきたくもなるだろう？　魔王に監視役を付けることは間違っていないし、奴に気に入られた私がその役に抜擢されるのも理解できる。…が、何故寄りにも寄って奴と一つ屋根の下で寝起きを共にしなければならぬ！？

それがつまり“監視”なのだろうが…だったら宿舍棟の2名部屋を宛がって（あてがって）くれればいいだろう！　それならあくまで仕事だと割り切れるじゃないか。なのにそんな…わざわざ…

…別に、「若い男女を同じ家に2名つきりで住ませるなんて…」などという頭の悪いことは考えていない。だが…だが！　あるだろう！　女子的モチベーションが…！

そうやって悶々（もんもん）と考え事をしていたら、どうやら書類を読み終わったらしい魔王が顔を上げた。目が合い、一瞬その鈍色の瞳に考えていた事全てが見透かされたような気がしてどきまぎするが、当然ながらそれは杞憂^{きゆう}だった。

「それで…その、どうなんだ」

自分自身を誤魔化すように軽く咳払いをすると、精神を落ち着けて今度こそ魔王と目を合わせる。別に期待などしてはいないが、聞いた手前一応彼からの答えを待つ。

——魔王が口を開いた。

「僕ね、字、読めない」

……。何だって!?

触ればふにふにしていそうな程柔らかな笑顔で、彼は書類を私に返した。

…確かに…期待していない答えだ。

そもそも考えもしなかった。

「そうか…お前は字が読めないのか」

呟くと脱力と妙な納得をしてしまい、小さな溜め息が漏れた。仕方がない…

「いいか? ここから読むぞ」

私は書類を再び魔王の方に向け、読んでいる箇所を指で追いながら朗読を始めた。

…本当は朗読なんてしたくはない。この忌々しい(いまましい)書類内容を、噛み締めるところか行儀よろしく咀嚼そしゃくしているような気分になるからだ。

「……以上が、ここに記載されていることだ」

紙に書かれた文章を読み終えた私は、がっくりと肩を落とした。何
度読んだって変わることはない、その圧制的な内容に。（さっきか
ら散々なことを言っているが、これがもしばれたら私は確実にく
びだ）

魔王とは言えば、聞いているうちにすっかり眠気も覚めたのか、き
らきらした“少年の笑み”でこちらを見ていた。

奴の気楽過ぎる態度に、私は肩を落としたまま溜め息を吐いた（つ
いた）。今回の私の質問は受理されなかったのか？ ……こいつには
改めてもう一度質問する必要があるそうだ。

「だからな、今言った内容について、お前は何か聞かされていない
のか？」

やはり大した期待はせずに、先程の質問を繰り返す。奴は相変わら

ず笑顔のままで、表現からでは知っているのか否か分からない。

——今度こそ、答えを述べるべく、魔王が口を開いた。

「知ってるよ」

「何だ…お前も…って、え？」

返ってくる言葉なんて予想していた。どうせ“知らない”と言うと思っていた。だから彼の返事など適当に聞いて、用意していた台詞を吐いたのだが…

「今、何て言った？」

「だから、その内容について知ってることがあるって言ったの」

またしても、予想外の返事だった。

“知っている”？ 何をだ？

例の会議に出席していなかったお前が何を知っている？ それはお前が知っていて私が知らないことか？

一瞬思考が追い付かないでいると、魔王は更に私を混乱させる一言を放った。

「だってそれ、僕が言ったんだもん」

いい年こいて“もん”とか言うな。

…って、そうじゃない！ それもそうだが…今はそれどころじゃない！

出席していないはずの男が機密会議の内容を知っている？ しかも、現在問題になっている書類の内容の発案者であるだど！？

…生き物というものは自分の予期せぬ出来事が起こると、どうやら思考が止まるらしい。恐らく今の私の顔ときたら、どうしようもない間抜け面だろう。

「クラナちゃん？」

目の前で振られる手のひら。その動きで私はハッと我に返り、慌て彼に質問を重ねた。

「何故お前が発案者なんだ!？」

対する魔王は慌てた様子など微塵みじんもなく、ふわふわと笑いながら楽しそうに答える。

「数日前にクラナちゃんが僕の監視役になったって言って来た奴がいてさ、その彼がそれにあたって何か条件とかあるのかって聞いてきたから、いろいろ聞いてもらったんだ」

おっ…お前かああああああ!!

お前が言ったのか!? 家一軒用意しろ!? とんだ王様発言だな! 上も何で聞き入れた!? : あっ、さっきは忌々しいだの圧制だの言って申し訳ありませんでした!

この書類についての全ての謎が解けた私は、とりあえず条件の内容については関係がなかった“上”の方々に懺悔ざんげした。

今は、「これから楽しみだねえ」なんてへらへらとほざいている目の前の男が、ただただ腹立たしかった。

朝目が覚めて、国王の使いの者が来て、魔王と中々噛み合わない会話をして……。何だかんだしている内に太陽はすっかり東の地平線から顔を出し、このスマイラックの街にもさんと春の暖かな日差しを注いでいた。

…が、そんな爽やかな朝とは正反対に、私の心は乱れていた。

「兎に角、決定してしまったことは仕方がない。引っ越しの準備をする他ないのだろう」

結局あの後5分間にも及ぶ葛藤を展開した私は、何とか見失い掛けていた自分を見付け出し、己に言い聞かせるが如く（ごとく）冒頭の台詞を切り出したのだった。

「ふふっ、これからクラナちゃんと一緒に暮らすんだ」

魔王は相変わらず浮わついているが、まあ放っておこう。

「さて：何か引っ越し道具の1つでもないものかな」

書類をよく読めば、家具や食器など生活に最低限必要な物は揃っているらしいので、引っ越しと言っても要は私物だけを持って行けばいいようだ。

しかし、いくら私の私物が少ないと言えど、何かしら運ぶための物でもなければそれは横暴というものだ。

部屋の中をぐると見渡すと、今朝使いの者とやり取りをしたこの部屋唯一の出入口がふと目に止まった。何やら変な予感（少なくとも良い予感ではない）がしたので、そちらに歩み寄ってドアを開けてみると…

「成る程…。流石、用意周到という訳か。」

扉を出てすぐ左側の壁際に、畳まれた状態の空段ボール箱が幾つかと、取手付きの台車が置かれていた。

箱を組み立てて、

クローゼットを開けて、

服を出して、

畳んで箱に詰めて、

本棚を覗いて、

本も箱に詰めて、

その他の私物も同じようにして、

箱を閉めた。

魔王が大人しくしていたこともあってか、荷造りは意外と短時間で終わった。

最後に椅子をテーブルの上に上げ、荷物を積んだ台車を押して数歩下がる。ドアの前で立ち止まり、台車はそのままに体の向きだけを反転させた。

すっかり生きている者の生活気をなくした部屋を、私と共に12年間もの月日を刻んだ自室を、私は改めて確認する。

結局私の私物なんて段ボール箱2、3個に収まってしまう程少なかった：が、物が取り除かれた部屋というのは何となく寂しい雰囲気漂わせていて、妙に殺風景に思えた。

「静かに：なったな」

思わずぽつりと呟けば、それは狭い“部屋”の広い“空間”に吸い込まれて消えた。

その状態のまま暫し（しばし）部屋を眺めていると、いろいろな思い出が蘇って（よみがえって）きて、やけに感傷的な気分になってしまった。私はその気持ちを誤魔化すように両足の踵を揃えて、右手を左胸の前に添える。

「終わりだ。お勤めご苦労」

敬礼の姿勢を取り部屋に礼を述べると、私は再びくると体を反転させ、後は一切振り向かず台車を押して部屋を出た。

魔王が黙って後ろから着いて来る。その表情はなぜか浮かなく、申し訳なさそうにちらと私を見た。

ばたん、と扉が閉まる音。

かちやり、と鍵が掛かる音。

がらがらがら、と台車の車輪が廊下を転がる音。

こつこつ、こつこつと、2名分の足音。

そして――

「随分としけた面だな。お前が望んでこうなったんだ。監視の目は厳しいからな。…行くぞ、新しい生活が始まる」

「……！ うん！」

1名の女が決意を込めて奏でる音と、それまで曇り顔だった男が表情を晴れやかにして肯定する音。

宿舎を出た我々は、太陽が真上から見下ろす道に踏み出した。

…上等だ。

メルカトウーラ王国国王直属王宮騎士、クレアティーナ。

この任、私のプライドに掛けて全う（まっとう）してみせる！

騎士と魔王のお引っ越し！？（後書き）

こんにちは、夢来です。今回は私が書いている別小説の宣伝をしたいと思います。

今日はクリスマスですね。という訳で、クリスマス特別読み切りを書きました！ “君にハッピークリスマス”、よろしくお願いします。

さて、私は数日前から冬休みです。2週間くらいしかない休みだというのに、学校からは皮肉なことに課題が山保出されました…。

休み中はそるを片付けなければならぬため、少しの間小説をお休み致します。言わば冬休みです。次回更新予定日は、来年1月29日です。

以上後書き、夢来でした。それでは皆さんよいお年を！

騎士と魔王の非日常（前書き）

これは騎士と魔王シリーズの完全番外編です。本編のこぼれ話を、4コマ漫画ならぬ4コマ小説にまとめた、4コマ劇場です。

後書きにこのシリーズについての言い訳が書いてありますので、更新を楽しみにして下さっていた方は、強制はしませんがご一読下さい。

騎士と魔王の非日常

1. “まぐ” 違い

【起】

“魔具” という単語には、日常生活内に同音の単語が存在する。

【承】

(コーヒーを飲もうとしているクレアティーナ)

「おい、悪いがそのマグを取ってもらえないか？」

【転】

「えっ？ 魔具？ クラナちゃんの魔具って…？」

【結】

「…………。そうだな、私が悪かったな。その“マグ” カップを取って貰えないか？」

「ごめんて、クラナちゃん！ 別にボケた訳じゃなくて…割と素でやっちゃったんだって！」

2. みんなの装填魔武具

【起】

(1名、魔武具について考える魔王)

クラナちゃんが言ってたみんなの魔武具…スプレー缶は催涙ガスと出ることかな？ 危ないな…。

【承】

羽ペン…鋭い部分で急所を一突き？ 危ないな！

【転】

人形は………

【結】

駄目だ！ 違う意味での“アブナイ” ことしか浮かばない！
「おい、どうかしたのか？」

3. 誰しも最初はそうして学んだ

【起】

魔王はこれできて結構な食い道楽だ。自分がよく分からない物でも、
食えそうな物なら取り敢えず口に入れてみる。

【承】

あも…。

「バターをそのまま食べるな！」

【転】

あも…。

「観葉植物は食べ物じゃない！」

【結】

あも…。

「せつ…馬鹿者おっ！ 石鹼は絶対に食べちゃいけない！」
「うえああ…クラナちゃあん……苦しい……」

騎士と魔王の非日常（後書き）

長らく更新を滞っていたこの騎士と魔王シリーズ、大変に私情ではございますが、作者の創作意欲が低下してしまったため、しばらく更新を停止したいと思います。また作者が創作意欲を取り戻し次第、更新を行おうという所存でございます。

また、現在は別小説の創作意欲が湧き、“ある凸凹な二人の話”という短編集を連載しております。作者の活動を気にして下さった方がいらっしやいましたら、是非そちらをご一読下さい。

以上後書き、夢来でした。

騎士と魔王と青い屋根の家!! 【その?】

宿舎を出た私たちは、私の隣を歩く魔王に台車を押させて、東に向かつて左へと伸びる歩道を歩き出した。正午の日差しがぽかぽかと暖かい。

こんな状況でなければ、この日差しを楽しみながら散歩することもできたのにと、私はいささか落胆^{らくたん}する。

隣を歩く魔王は台車を押しながらことにこと笑っていて、時折風に乗って彼の鼻歌なぞが聞こえてくる。そんな魔王が羨ましくも恨めしい。

「わ…」

しばらく歩くこと十数分。我々は街のメインストリートに着いた。道の端には大小様々、多種多様な店が軒先を並べている。活気溢れる空気を纏い（まとい）、各店の主人や店員が客の呼び込みをしていた。

「いらっしゃい！ 今朝採れたばかりの新鮮な野菜だよ！」

「お昼に最適、焼き立てホカホカのパンはどうだい？」

「靴の修理、服の仕立て、他に見ない安さで承っております」

「あなたの近い未来が見えます…。水鏡占い…一回500ロッド。信じるか信じないかは貴方次第…」

「ばあちゃん！ うちクリーニング屋だから！ 何！？ 水鏡占いで！！」

魔王はそんな店々を物珍しそうに眺めながら、忙しそうにきよろきよろと視線を動かしている。…そして、時々店の前で立ち止まりそうにもなってる。

白石で、機能的にも見た目的にも綺麗に舗装された歩道の上を、魔王は台車を押しながら、私は店先にて度々止まりそうになる魔王の背中を押しながら、住宅地を目指して進んでいた。

「クラナちゃんストップ！」

「止まるな、歩け」

「う…僕、これじゃあ囚人か捕虜みたい」

「“みたい”じゃなくてそうなんだ」

「えっ……」

メインストリートを抜け、幾つか角を曲がると、そこはもう閑静な住宅街だった。白い壁、緑の庭、そして色とりどりの屋根が並んでいる。

平日の昼間だけあって流石にすれ違う住民は少ないが、むしろそれが街とはまた違い、のんびりとした空気を作っているようにも思えた。

「えっと…この道を右に…いや、もう一本向こうか」

書類の隅にやや小さめに記された地図と住所を頼りに、私はこれらの活動拠点となる家を探す。地図を確認するために立ち止まり、もう少し進んだ先を右に曲がることを知ると、私は再び歩を進めようと…

「「クレアーーーーッ!!」」

……歩みを進めようとした時だった。どんっ、と下半身に何か小さなものが飛び付いて来て、私はあやうくバランスを崩して転倒してしまいそうになった。

「わっ…と…！」

「大丈夫？」

ぐらりと傾いた体を魔王に支えられて、何とか体勢を保つ。大丈夫だと短く告げると、私は慌てて自分の下を見た。そして、

「クレア！ ひさしぶり！」

「ひさしぶり！ クレア！」

「あ…お前たち……」

私の腰に手を回して、幼い男女の子供2名が見上げているのを確認した。彼らは昔（と言っても2年程前だが）私が仕事で巡回をしているときに、この住宅街で何度か会ったことのある兄妹だった。

…そう言えば、私は戦いが終わってから今まで巡回をしていなかったから、彼らと会うのは随分と久し振りだ。

「久し振りだな。元気にしていたか？」

「「うんーっ！」」

子供たちは元気に答える。のどかな街に明るい子供たち：何だか穏やかで微笑ましい気持ちになるようで、思わず頬が緩むのを感じる。

兄妹は満面の笑みを浮かべながら、交互に質問をしてきた。

「おしごとはもういいの？」

「ああ、一段落ついたよ」

「またパトロールに来るの？」

「どうかな…ただ、この近くに住むことになったんだよ」

「ほんと！？」

「やったー！！」

2名ははしゃぎながら驚いたり喜んだりしている。期待していた答えが返って来れば満足そうに笑い、それ以上の答えが返って来れば素直に喜ぶ。子供とは実に無邪気で可愛い。

そんな2名を眺めながら笑みを深めると、彼らは更にこんな質問を

した。

「「その男の子はだあれ？」」

「…………。」

——私は、笑顔のまま凍り付いた。

期待に満ちた顔で目を輝かせ、答えを待つ兄妹。そして、ゆっくりと振り向けば…

「…………？」

皮肉にも可愛らしい笑顔で、「どうしたの？」と言わんばかりにきよとりと首を傾げる魔王。

いや…これは…どうするべきだ、私！

「いっ…いや、その…こいつはなっ…！」

好奇心が旺盛な盛りの子供たちだ。そりゃあ知り合いの隣に見知らぬ男がいれば、それが何者なのか気になりもするだろう。

だが、こんな時何て答えれば正解だ？ まさか“これが世界を脅かした魔王です”なんて、口が裂けても言えやしない。

彼らの言葉にすっかり混乱してしまった私は、しどろもどろに言葉を紡ぎつつ、わたわたと狼狽えて（うろたえて）いた。俗語で言う所の“テンパる”というやつだ。

恐らく不自然に視線を泳がせているだろう私を、可愛い兄妹はきよんとんとした顔で見上げている。…と、突然兄の方が真剣な顔付きになり、ぽつりと呟いた。

「もしかして…」

「うっ…」

ぎくり、と自分の肩が揺れたのが分かる。

ばれたか？ 何を？ 何が？ それともはたまた私の態度に不信感を覚えたのか…！？

さっきとはうって代わり、じととした目で私を見上げている少年。子供は何も分かっていないようで、時に大人よりも鋭い発言をする。彼の言葉の続きを内心びくびくしながら待っていると、彼はニッと口角を上げて、ビシッと物差し指を私に突き付けて言い放った。

「さてはそのにーちゃん、“魔王”に捕まってクレアが助けたってウワサの男だろ！」

……………え？

——いやいや、“え？”ではない。近頃の私は“え？”だの“は？”だの弛んで（たるんで）いる。

私は心中で自身に活を入れると、自信に満ちた顔の少年と目を会わせる。混乱していた頭の中は、彼の鋭い発言によりすっかり整っていた。

「ああ、その通りだ。何分こいつは長らく民の暮らしから離れていたからな。何かしらの不自由があるだろうということで、私が共に生活することになったんだ」

そう、そうだ。確かこいつにはそういう設定が付いたのだった。ほっ、と息を吐くと、安心から再び笑顔が浮かんだ。

「それ、ママがお話してたことじゃない」

と、思ったら、今度は妹の方が声を上げた。

「おにちゃんったら、クレアにいいところ見せようとしてるのよ」

両手を腰に当てて、少女はませた態度でそう告げる。

「ばっ…ちげーし！ おれが今そう考えたんだし！」

「うそばっか！ ずーっと前とか、この前とか、少し前とかにママが話してたもん」

やや舌足らずな喋り方で、両者は兄妹喧嘩を始めてしまった…。

「それは：おれがかあさんに教えてあげたんだし！」

「お兄ちゃんたらうそばっか！　うそつきさんはお家から追い出されちゃうんだから」

「そしたらおれ、“いこいのひろば”で暮らすからいいもん！」

「ひろばにはご飯がないからお兄ちゃん泣いちゃうでしょ！」

「泣かねーよ！　隣の家のおばさんとかにパンもらうからな！　家なんて追い出されても生きていけるし」

私はその様子を苦笑しながら見守っていたのだが、兄のその一言に妹の方が泣きそうになってしまい、慌てて仲裁に入った。

「ほらほら、喧嘩はよせ。その首から提げてる財布は何だ？　お前たちはお使いを頼まれているんじゃないのか？」

「あっ、そうだ」

「早くしないとママに怒られちゃう」

兄妹は揃ってはっとした顔になると、勢いよく互いの顔を見合わせ

た。そして、

「ばいばい、クレア！」

「クレア、ばいばい！」

2名は小さな手を取り合うと、ぱたぱたと足音を響かせて駆けて行った。

「ふう……」

小さな嵐が過ぎ去って行くのを見送って、私はそれまで静かに待機していた魔王に顔を向けた。

「すまない、待たせたな。行こう」

彼は“うん”と短く返事をする、片手を台車の持ち手から離して私の方に差し出した。

「…なんだ、その手は」

「ん？ さっきの子たちみたいにさ」

パシンッ

乾いた音が、静かな住宅街に小さく生まれてすぐに消えた。面白くなさそうな顔で叩かれた（はたかれた）てのひら 掌を見詰める魔王を残し、私はさっさと歩き出す。

全く……。少しでも奴に“待たせてしまって申し訳ない”という気持ちを持ってしまった自分が恥ずかしい。

「ねえ、クラナちゃん。さっきの子たちって何なの？」

道を歩きながら、魔王がそう尋ねてきた。機嫌はもう直ったのだろうか。

「まあ：知り合いだよ。この辺りを巡視している時に知り合った。この辺の住民は大体そうだがな」

「へえ：顔が広いんだ」

そうかな、などと適当に返事をしつつ、私は全く別のことを考えていた。

：まさか、“魔王に捕まった男の話”がここまで広まっているとは思わなんだ。うっかり変なぼろを出さぬように注意を払わねば。

「じゃあさ、さっき男の子が言ってた、“いこいのひろば”って何？」

遠回しに邪険にされているのを知ってか知らずか（恐らく知らずに）、魔王は更に質問を重ねてきた。どうやら機嫌は直っているらしい。昨晚の如き質問攻めだ。

私は進行方向に現れた十字路を右に曲がり、2、3歩進んでから奴の質問に答えた。

「この道をずっと行くと坂があって、その上の小高い丘に広場があるんだ。そこを住民たちは“憩いの広場”と呼んでいる」

「へえ…。見てみたいな」

「いつか機会があればな」

そこまで言って、私は歩みを止めた。それに合わせて魔王も止まる。

「そして…」

私は地図と辺りをぐるりと確認してから、進行方向より左を向いた。

「ここが、これから我々が生活する住居だ」

視線の先には、住宅街に並ぶ家々と変わらない造りの一軒家が建っていた。

目が痛くなる程の真っ白な壁に、鮮やかな青い屋根。出入口のドアの向かって右隣に、大きな窓が付いている。カーテンが閉まっているため中は見えないが、恐らくリビングの窓だろう。

「新しいね。家代や土地代を考えたらぞつとしちゃう」

「考えるな。こちらにそれは請求されていないんだ」

魔王の全く的確を射た意見に実際ぞつとしたが、敢えてその辺のことには触れないようにした。ポケットを探って鍵を取り出しながら、私は家のドアへと近付く。

「お前の鍵だ」

2つ出てきた鍵の内、1つを魔王に渡す。

「ありがとう」

彼の礼を聞きながら、私は自分の鍵を鍵穴に差し込んだ。そして…そこで、ぴたりと手が止まる。

これを開けたら…本当にこいつとの生活が始まってしまう……。

ふと、そんな考えが脳裏を過った（よぎった）のだ。

どうした？ 私は先程腹をくくったはずだ。何を躊躇う（ためらう）、何を怖じ気づく？

その一瞬の弱気な思いを振り払うように、私は自身を叱咤^{しった}して、鍵穴に差した鍵を回した。

カチャン

小さな音がして、鍵が外れる感触があった。

——さあ、もう後には戻れない。弱気になるなよ、クレアティーナ。
ガチャリ、と音を立てて扉が開いた。開いた先には当然玄関があつて、

「おお…」

玄関を上がった先には廊下が続いているのが見える。

何を隠そう、私は昔から一戸建てに住むのが夢だった。随分と不本意な形で住むことになった上に、この家は極一般的な民家であるが、

やはりつい感動詞が漏れてしまった。

玄関に入って左側にはシューズロッカーがあり、私は取り敢えずその扉を引き開けてみた。中には上2段に渡りスリッパが10足程度入っていたので、2足を取り出して廊下に置く。

ドサッ

私がスリッパを置くと同時に、すぐ隣に積まれた段ボールが置かれた。少々呆けていたために驚き（それもほんの少しだが）、反射的に顔を上げると、

「とりあえず荷物はここ置いとくね」

魔王がにっこりと笑っていた。私が誰かと会話している時には黙って待っていたり、特に指示されなくともこうして荷物を運んで来たり、こいつはこれでいて中々気が利くようだ。

そんなことを考えながら、すまないな、と短く言うと、私は履いていた靴を脱いでスリッパに足を通した。魔王もそれに倣って（ならって）家にかかる。

「では、一通り家の中を見て来るか」

その様子を確認すると、私はそう提案した。

「うん」

魔王が嬉しそうに返事をして、我々の家探索が始まった。

「リビングだ」

まず、廊下を少し進んで右側にあるドアを開けた。そこは外から見た時に考えたように、案の定リビングだった。

部屋の右側には外から見えた窓、入って正面にはそれより大きめの窓があった。薄手のレースのカーテンから日光が漏れ、辺りを仄明るく（ほのあかるく）照らしている。

また、右側のスペースには黒い革製のソファが置いてあり、寛ぐ（

くつろぐ)のには最適そうだった。

「庭だ！ 花壇があるよ、クラナちゃん。何か植える？」

魔王は真っ先に正面の窓に駆け寄り、カーテンをさっと引いた。緑の芝で覆われた庭が現れ、同時に注ぎ込む日光の量もやや増える。

「まあ…そのうちな」

私は曖昧な返事を返すと、視線を部屋の左側に向けた。

そこには長方形のテーブルが置かれており、更にその左隣には対面式のシステムキッチンがあった。テーブル前に置かれた椅子の数は8つ。スリッパの数と言い、椅子の数と言い、これは誰かを招待しても構わないということなのだろうか。

「…ん？」

私はキッチンへと足を進め、その途中でテーブルの上に何かが乗っていることに気が付いた。何かと思って近付いてみればそれはペンと新品のメモ用紙で、

“日用品はある程度揃えて御座います。足りないものがありましたら、そちらでお買い求め下さい。”

一番上の紙にはそう書かれていた。

「…他者事だと思って」

何だか不意打ちで追い打ちを掛けられたような気分になり、私はその紙を破るとごみ箱に捨てた。

「さて…足りない物と言っても、大抵は揃っているようだな」

キッチンにて、戸棚や引き出しを明け閉めしながら食器や調味料の確認をした私は、最後に冷蔵魔具のコードを差し込んで立ち上がった。

魔力の注入が開始された冷蔵魔具は、ヴウウウン…と小さな唸り声を立て始める。しっかりと起動したことを確かめて、私は手にしたメモ用紙に“食材”と書き込んだ。

「おい、別の場所を見に行くぞ」

部屋のドアに向かいながらソファに寝そべる魔王に声を掛ければ、奴はすぐさま起き上がって私の元に寄って来た。

「待って」

……いや、お前が待て。一瞬見過ごしたが、早速寛ぎ過ぎだろう。

騎士と魔王と青い屋根の家!! 【その?】 (後書き)

悩みましたが、以前途中まで書いていたものを投稿しました。この続きはまだ書いていないし、また書くかも定かではありませんが、気長にお待ち頂ければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0864p/>

騎士で勇者で魔王の恋人!?

2011年2月24日13時32分発行